

飯ノ木生まれの国学者



10月2日(木)に西源寺(大跡)にて、田中道麿翁顕彰会主催の慰霊法要が執り行われ、地域住民や関係団体などが参列しました。

田中道麿は美濃国多芸郡榛木村(現在の養老町飯ノ木)に生まれ、主に万葉集の研究を進めた国学者であり、自身のことを「飯木翁」と号していました。名古屋で開いた講座には300を超える人が集ったと言われ、その功績は国学の四大人として知られる本居宣長が著書の中でたたえるほどでした。また、幼い頃より歌を詠み、多くの作品を遺しています。

参列者は田中道麿の功績と勉学への信念をたたえ、翁の偉業を胸に養老町が文化のまちとしてより一層発展していくよう祈念しました。

マルシェで楽しむ買い物と会話



9月27日(土)に町役場玄関前駐車場において、軽トラSDGsマルシェを開催しました。このマルシェでは飲食物や農作物、衣料品などが販売され、お店の人との会話を楽しみながら買い物をすることで、地域コミュニティの拡大を目的としています。

マルシェには13店舗が出店し、町特産ブランド認証品をはじめとした“養老町ならではの”商品や農作物、衣料品などを販売することで、来場者にSDGsを身近に感じてもらえる機会としました。また、会場は7時30分の開場と同時に多くの来場者で賑わい、笑顔があふれ、交流が生まれました。次の開催は3月14日(土)です。皆さまのご来場をお待ちしています。

有由有縁 ふるさとを語る



10月5日(日)に養老町出身で名誉町民である日本画家 土屋禮一さんと岐阜県美術館前館長でOKBギャラリーおおがき館長である古川秀昭さんによるトークイベント「有由有縁 ふるさとを語る」が町中央公民館中ホールにて開催されました。

土屋さんは「父の死後、残された自分や家族を支えてくれた人たちがいる、そんな場所が私にとってのふるさと養老町です。頬を撫でる風、植物、食べ物から感じるふるさとの匂いがかつての記憶を呼び覚まします。懐かしいふるさととは、私の作品の入口となっています。人生に無駄なことはありません。良いことも辛いことも次に生きます」と、出会いにはすべて意味があり、結ばれた縁によって自身の生き方や作品が彩られていっていると話しました。

絆を“かたち”へ



初めての地域移行クラブとして4月から活動をスタートした養老剣友会より、10月3日(金)に電波壁掛け時計を寄附いただきました。

同会の中村宏衣代表は、発足からこれまで活動を続けることができた感謝と、生徒や保護者が全員で協力して活動する中で生まれた絆について話し、「これまで力を合わせて活動してきたことを形に残したいと思い、寄附しました」と寄附の経緯を話しました。生徒たちは「県大会に団体で出場することを目標とし、チームの輪を大切にしながら頑張ってきました。仲の良さが剣友会の良さだと思います」と話しました。

いただいた電波壁掛け時計は、同会の活動拠点である高田中学校格技場に設置し、大切に使用させていただきます。